Dalkey Archive

ドーキー・アーカイヴ

全10巻

責任編集
若島正＋横山茂雄

国書刊行会

創刊にあたって

小社では創立まもない一九七五年に紀田順一郎・荒俣宏両氏の責任編集で〈世界幻想文学大系〉（全三期・四十五巻）を刊行、以来つねに異端・綺想・前衛の文学を世に送り出してきました。そして、二〇一六年、原点に戻るべく「国書刊行会にしか出せない（出さない）海外文学叢書」を刊行するために責任編集を若島正、横山茂雄のお二人にお願いし、知名度や受賞歴云々一切関係なく、時代やジャンルを超えた傑作・問題作・異色作を十巻選出していただきました（全巻内容は本冊子巻末に掲載）。

全世界で生まれる厖大な数の文学作品群から翻訳紹介されたのはごく一部にすぎず（その選出精度も怪しいものが多い）、必ずや知られざる傑作、未知の優れた作家が存在すると確信していましたが、「なぜこれほど凄いものが眠っていたのか」と驚く作品がずらりと並んだ鮮烈なラインナップとなりました。ジャンルを逸脱・超越した作品、なにやら得体の知れないものとして今まで見過ごされた作品がようやく純粋に楽しめるようになるのです。

〈ドーキー・アーカイヴ〉には、未来の読者、つまり我々のために熟成された美酒が揃っています。味わったことのない奇妙な味、毒かと思うような刺激の強いもの……ともあれ、口当たりのいい清涼飲料水で満足している読書人は本シリーズで〝酩酊する快楽〟を知ることになるでしょう。

願わくは、読者諸賢の絶大なる御支援を賜らんことを。

国書刊行会

〈ドーキー・アーカイヴ〉刊行記念対談

若島正×横山茂雄

若島　今回、私と横山茂雄さんの責任編集で新しい海外文学シリーズを始めることになりました。国書刊行会からの依頼としては、誰も知らない作家の傑作、とびきり変な小説をわれわれが五冊ずつ選んで全十巻にする、というものです。その結果、幻想怪奇・ホラー・ミステリ・SF・自伝……とあらゆるジャンルの、何でもありの、言ってみれば無茶苦茶なラインナップになりました。その十冊についてこれから紹介していこう、という趣向です。

横山　お互いに五冊選んで全十巻なんて、ずいぶん乱暴で安易な企画ともいえますが（笑）、いっぽうで、予想通りというべきか、まあ大変な十冊になりましたね。大半の人は名前すら聞いたことがない作家も多い。たとえば、若島さんが選んだ作品である**アイリス・オーウェンズ**の**『アフター・クロード』**（一九七三）は、私も全然知らなかった。

若島　アイリス・オーウェンズは私も最近〝発見〟した作家なんです。彼女はアメリカ人で、パリでぶらぶらしてたときに、あの悪名高いオリンピア・プレスのモーリス・ジロディアスに会って、ポルノを書けと言われて実際デビューしたんですね、ハリエット・ダイムラーという「美人ポルノ作家」という触れ込みで。オリンピア・プレスの看板娘という感じで五冊ぐらいポルノ小説を書いているんです。

横山　ああ、なるほど。アメリカの作家、芸術家でよくあるパターンですね、パリに行って活動を始めて……という。

若島　そうですね。で彼女はアメリカに帰ったあとはポルノではなく普通の小説を書き始める。『アフター・クロード』もその中の一冊ですね。そもそも彼女のポルノ小説を知ったきっかけというのが、小鷹信光さんのおかげなんです。数年前小鷹さんのお宅に伺った時に、小鷹さんがポルノ小説のペーパーバックをどーんと積んで、好きなやつをお土産に持って行って良いですよ、と。それでハリエット・ダイムラーを一冊抜いた。

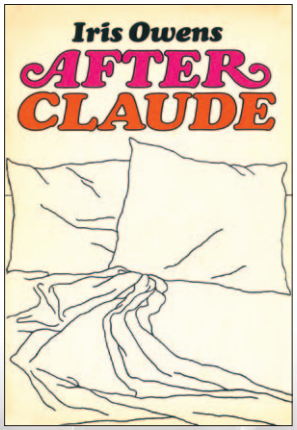
アイリス・オーウェンズ

横山　それはまったくの偶然なんですか。

若島　たまたまではあるんですが、理由はありまして、その本（*The New Organization*）は中身がオリンピア・プレスの版そのまま、表紙だけ付け替えてVACATION BOOKSというところから出たという体裁になっている。実はこれは日本の海賊版で、そういう本があるのは知っていたんですね。それでハリエット・ダイムラーを初めて読んで、それが無茶苦茶面白かった。サドをテーマにしたアンチ・ポルノなんです。相当な才女だなと思いまして、彼女の作品をいろいろ読んで『アフター・クロード』にたどり着いてビックリたまげたわけ、面白すぎるので。女性の一人称小説で、昔でいうとレニー・ブルースみたいな悪口が速射砲のように連発されるんですね。威勢はいいんですが、実はそれが空威張りで、そこから悲惨な現実が透けて見えるという物語。この本の破天荒な語りを日本語に置き換えることが出来るのは、渡辺佐智江さんしかいない、と思って彼女にオーウェンズを薦めたらすぐに「面白い！」と言ってくれまして、二人でオーウェンズ・ファンクラブを結成しました（笑）。あと、スーザン・ソンタグの日記を読んでいたら、アイリス・オーウェンズが出てきてね。ソンタグもパリにいたころがあって、アイリスに会ったことがあると。そのパリのサークルでは女王様のような存在だったと。

横山　スーザン・ソンタグとアイリス・オーウェンズは同世代なの？

若島　ほぼ同世代ですね。スーザン・ソンタグは誰でも知

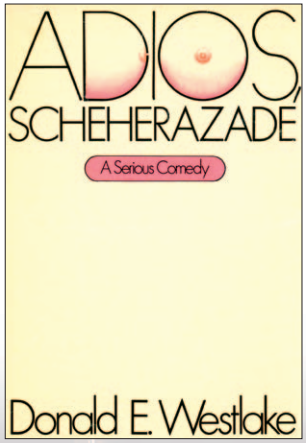


『アフター・クロード』
原書カバー

ってるけど、アイリス・オーウェンズとかハリエット・ダイムラーなんて名前、誰も聞いたことがないでしょう（笑）。こんな凄い作品を書いているのに、ちょっと可哀想じゃないか、ということでセレクトしたんですね。

横山　そういえば、若島さんが選んだ**ドナルド・E・ウェストレイク『さらば、シェヘラザード』**（一九七〇）もポルノ小説家の話だし、若島さんの個人的な趣味、嗜好が窺えるような気がしますけれど（笑）。

若島　そうそう、これはポルノ小説ではなくてポルノ小説家の話で、下積みのころに偽名でポルノ小説を書いていたこともあるウェストレイクの半自伝的な作品なんです。若い頃に読んで、ウェストレイクお得意の艶笑譚としてゲラゲラ笑える傑作なんですが、造りが凝っているんですよ。ポルノ小説家が主人公で締め切りを過ぎてもなかなか書けなくて、一章十五ページずつありきたりのポルノを書こうとしてもすぐに、自分の生活のあれこれ、夫婦の問題を書き込んでしまって挫折する。で、この本はそのポルノ小説の一章がえんえん書きなおされて繰り返されるんです（笑）。だからページ数が上と下に二つ付いていて、上はずっと1―15の繰り返し。これは前代未聞の造りでしょうね。ウェストレイクは有名な〈ドートマンダー〉シリーズや、リチャード・スターク名義の〈悪党パーカー〉シリーズをはじめとして、ほとんど訳されているけど、この本が未訳なのはそういう特殊な造りのせいかもあるかもしれない。『さらば、シェヘラザード』を読むきっかけになったのも、やっぱり小鷹さんです。小鷹さんが雑誌連載で紹介していて面白そうだなと。小鷹さんの影響は大きいですね。



『さらば、シェヘラザード』原書カバー

横山　ぼくは人間がお上品なもんで（笑）、ポルノは読まないからなあ。若島さんがポルノ小説を読むのは、映画だったら裸さえ出しておけばアナーキーなことが許されるという場合もあるでしょう、それに似た感覚で追っておられるわけですか。

若島　もともとジャンル小説は好きですし、ナボコフの『ロリータ』も最初はオリンピア・プレスから出たということもあります。ジャンル小説に特有のくだらない本が圧倒的に多い中で、稀にハリエット・ダイムラーのようにおおっと思うような作家を発見することもあり、その砂中に金を探すような快感がたまらない（笑）。

横山　日本での海外ポルノ小説の紹介はもちろん戦前からあるけれど、その頃はまだ一部の好事家向けという感じ。「大衆化」するのは一九六〇年代後半くらいでしょうか、胡桃沢耕史が浪速書房から乱発していたシリーズとかね。

若島　そうそう、清水正二郎という名義でね。そういえば先ほど話題に出したハリエット・ダイムラーのアンチ・ポルノ小説は実は日本で翻訳が出ているんです。『淫蕩な組織』という題名で、訳者が清水正二郎。元の小説は造語とかもあって翻訳が難しそうなんで、どういうもの

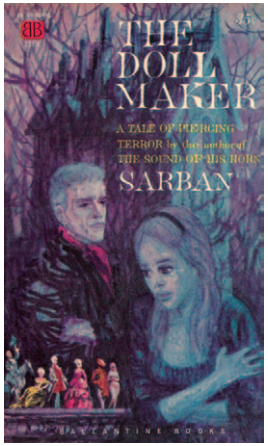
か読んでみたら、全然インチキ（笑）。翻訳ではなく完全な創作で、ダイムラーの原書とは関係ないものでしたね。このあたりの出鱈目さは有名で、ヘンリー・ギェームズ著の『巨大なベッド』というのもやはり清水正二郎訳ということで浪速書房から出ています（笑）。ヘンリー・ジェイムズがポルノを書くわけないだろ、と当時の読者は思わなかったんでしょうかね。実はこれ、オリンピア・プレスで出ていたもので、作者の正しい名前はヘンリー・ジョーンズ（笑）。では、ポルノからSMという流れで**サーバン**に行きましょうか。

横山　誤解を避けるためにいっておくと、サーバンはイギリスの団鬼六というわけではありません（笑）。独特のエロティシズムに溢れる幻想的な作品をごく少数だけ遺した作家です。六〇年代にハヤカワSFシリーズで彼の『角笛の音の響くとき』（一九五二）が邦訳されて、中学生のときに読みましたが、単純に小説として面白かった。まあ、沼正三あたりはすごく興奮したんだろうな（笑）。日本での紹介は『角笛』のみに終わり、大学生になってから他の作品を探しても入手困難でね。『角笛』は、ディックの『高い城の男』と同じく、ナチスが勝利した世界という歴史改変あるいはパラレルワールドものSFと解釈できなくもない。とはいえ、作者自身は特にSFを書いたつもりはなかったでしょう。サーバンは性的支配や拘束というテーマに取り憑かれた人なんですよ。ナチスが絡めてあるので『角笛』は普通の読者にもとっつきやすくなっていますが、今度出る**『人形つくり』**に収められたふたつの作品では、そのテーマがもっと濃いかたちで展開されています。

若島　サーバンは拘束具が好きなんですよね（笑）。サハラ砂漠を舞台にした、生前未発表の中篇「湖の王」にも、やはり奇妙な拘束具が出てきます。彼は覆面作家で、本職が真面目なイギリスの外交官なんですね。中近東に勤務していたこともあるんで、そのときの異文化に接した体験が彼のエキゾチックな作風に影響していると思います。

横山　生来の性癖に非西欧圏での体験が混淆して、異様な妄想世界が広がっていく。「人形つくり」（一九五三）は田舎の女子寄宿舎学校が舞台で、少女が人形つくりが趣味の青年と出会って、彼の人形のモデルになるけれど、その青年の真の目的は……という話。いっぽう、「リングストーンズ」（一九五一）は大きなお屋敷でアルバイトの家庭教師として雇われた女子大生の手記で、屋敷の子供たちと過ごす夏休みがだんだん奇怪な様相を帯びてくる……というお話。以前に私が書いたエッセイから引用すると、繊細で喚起力が強い文体を通じて「徹底した被支配関係から生じる魅惑と恐怖のないまざった荒々しいマゾヒズム的快感」が描写されるわけです。

若島　英国領事館での勤務を黙々とこなしながら、奇怪なSM幻想に浸っていた静かな男。そういう不思議な、忘れ去られた作家の作品がシリーズの冒頭を飾るのもなかなか凄いですが、インパクトはありますよね。もう一人、サーバンとともに刊

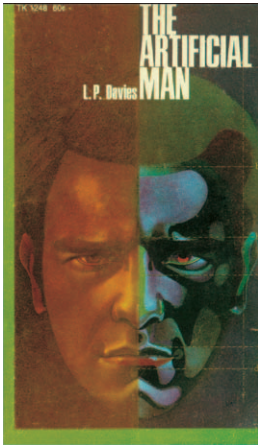


『人形つくり』原書カバー

行されるL・P・デイヴィス、彼も日本ではまだ『忌まわしき絆』の一冊しか翻訳が出ていなくて（論創社刊）、忘れ去られた作家、今ではほとんど知られてない作家ですが、実は凄い人です。ミステリとSFあるいはホラーのボーダーラインに位置する作家ということで、ジョン・ブラックバーンと似た感じがあって、それこそ作品数の多さでも良い勝負をしている印象がある。

横山　デイヴィスはSFの世界では評価されているんですか？

若島　いや全然（笑）。なんの評価もない、というかSF作家として認知されてないですね。デイヴィスもたくさん作品がありまして、本シリーズではスタートを飾る作品として、一番ぶっとんでるやつを選びました。この『**虚構の男**』（一九六五）は国際謀略スパイ小説という具合に始まるけども実際はSFでもあって、途中でどんでん返しを何度もやって読んでいてハラハラするんですね、大丈夫なのかなこの小説は？と（笑）。それで、最後には唖然とするしかない結末を迎える、実に驚くべき作品です。一九六五年刊行作ですが物語の設定が一九六六年とその五十年後の二〇一六年、ということで、今年翻訳刊行されるのが決まっていたような作品ですね。横山さんはデイヴィスはどうですか。



『虚構の男』原書カバー

横山　結構読んでましたね。変な小説を探していると、ひっかかってくる作家（笑）。ブラックバーンと同様、SF、ミステリ、ホラーといったジャンルのひとつに分類するのが困難な作家でしょう。

若島　関係ないけど、ブラックバーンは古本屋の親父で、デイヴィスはタバコ屋の親父なんだよね。

横山　どちらも暇そうだ（笑）。店内でこつこつ小説を書いて、むしろそちらで金を稼いでいたんじゃないかな。ブラックバーンには古書業界を舞台にした作品もありましたよ。

若島　デイヴィスの本のカバーに載ってる著者近影は大体タバコ屋の店内にいる写真を使ってます（笑）。『虚構の男』は映画化もされてて、かのギミック映画の巨匠ウィリアム・キャッスルが監督していますね。日本では劇場未公開で、タイトルは“Project X”（TV放映邦題『危機一髪！西半球最後の日』）。

横山　これは意外にもキャッスルにしてはケレンがない（笑）。とはいえ、キャッスルが映画化したということは、デイヴィスも鬼面人を驚かす類の作品を書く人という扱いだったのかな。

若島　そうかもしれない。でも映画のほうは最初からSF寄りで原作の形をほとんどとどめていませんね。この『虚構の男』

L・P・デイヴィス

はディックの『時は乱れて』に似ているとも言われてますが、どこが似ているのか判らない。いくらなんでも、ディックはここまでハチャメチャじゃない（笑）。彼の作品はどれもとにかく変としか言いようがないけれど、一応ジャンル小説の体裁をとっていて、だいたい二百頁足らず、ということで明らかに職業的なエンターテインメントを意識しているのが面白いですね。

横山　さっきもいったけれど、デイヴィスやブラックバーンはおそらく生活の安定のために書き始めたので、そのあたりのフォーマットは常に意識している。いわば職人気質。いっぽうで、世の中には、精神の安定というか崩壊を防ぐために書かざるをえないというタイプの作家もいますよね。たとえば、**シャーリイ・ジャクスン**なんかそうじゃないかな。まあ、書いているうちに逆に「悪化」するような気もしますが（笑）。

若島　シャーリイ・ジャクスンは**『鳥の巣』**（一九五四）という初期の長篇、これは多重人格ものなんですが、なぜ今まで訳されていなかったのか不思議なほどの傑作です。本シリーズで、一番知名度が高いのはジャクスンかな。あまりにも知らない作家ばかりだと読者も戸惑うだろうと思いまして（笑）選びました。多重人格ものと言えば、先ほどのL・P・デイヴィスも何冊か書いているし、我が国ではよく知られたダニエル・キイスの『五番目のサリー』というような例もあるわけですが、実を言うとジャクスンの『鳥の巣』はそうした作品群に先立つ、多重人格ものの枠組みをこしらえてしまった作品です。L・P・デイヴィスの場合だと、多重人格というネタをあくまでもストーリーの牽引力として使っていて、その意味でエンターテインメントに徹していますが、ジャクスンの『鳥の巣』はそれよりはるかに病んでいる、真に恐ろしい小説になっています。

『鳥の巣』原書カバー

横山　短篇「くじ」と幽霊屋敷ものの長篇『山荘綺譚』（恐怖映画の傑作『たたり』の原作）があまりに有名になったので、ジャクスンには一般的にホラー作家というイメージがつきまといがちですが、女性の心理の暗黒面、深淵にこだわって、その挙句にとんでもないところまで辿り着いた人ですよね。ホラーという言葉で括ってしまうのには、違和感を覚える。彼女の作品には明らかに深く病んでいる部分があって、現在に至るまで一定数の読者を惹きつけるのもそのためかなとも思います。

若島　ジャクスンは最近伝記も出て、本国でも再評価が進んでいますね。日本でも新しい短篇集や、未紹介だった長篇も出始めている。ジャクスンの短篇は訳がわからないやつ、何が起きているのか困惑する作品がたくさんあって、今でも読み応えがあるものが多い。そこはロバート・エイクマンに似ているところがありますね。ということで、横山さんが選んだ**ロバート・エイクマン『救出の試み』**（一九六六）。怪奇小説の巨匠エイクマンは、つい最近でも短篇集『奥の部屋』が〈モダン・ホラーの極北〉という惹句でもって文庫にも入りました。ただし

『救出の試み』はなんと小説ではなくてエイクマンの自伝。

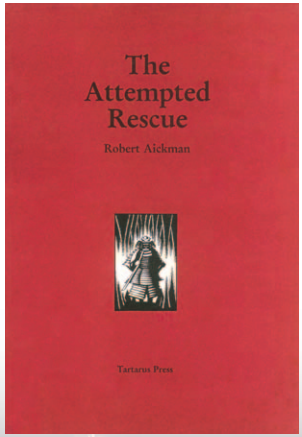
横山　いやあ、思い切ってやってしまいました（笑）。これも稀少本で長いこと手に入らなかったけれど、正直なところ、自伝だから別に読まなくてもいいかと思っていた。ところが、ようやく入手できて大して期待もせず読みだしたら、驚くべきことに異常に面白い。こんな面白い自伝があったのか、ある意味では、エイクマンの小説よりも面白いんじゃないかと。

若島　内容としてはエイクマンの幼少期から作家になるまでの自伝ですね。面白いというのは、やはりエイクマンの父親のくだりですか。

横山　この自伝は「父はいまだに私の知るうちで最も奇矯な人物である」という文章から始まります。エイクマンの父親は建築家だったそうですが、出自を語らず年齢も不詳で、見た目がとんでもなく若く見える容貌で、母親（『黄金虫』を書いたリチャード・マーシュの娘）は結婚後に夫が実は五十代だと知って衝撃を受けたという（笑）。ともかく異様な家族なんですよ。あと本人の恋愛話も出てくるんだけど、過激な恋愛観でね。やっぱりエイクマンも病んでいる……というか、もう一家ごと病んでいる（笑）。さらに言えば、一九二〇年代英国中産階級の一家族を描いた書物としても傑出した出来です。しかし、エイクマンは小説家として別に有名ではなかったのに、よく自伝なんか出版できたなあと。出版社にコネがあったのかしら。

若島　最近タータラス・プレスみたいに、エイクマンが書いたものは全部刊行するという出版社もありますからね。こないだはドキュメンタリーＤＶＤ付きの作品集なんてのが出て驚いた。そのＤＶＤを一時間観て、すっかり堪能しました。さらにはフェイバー・アンド・フェイバー社がエイクマンの短篇集をまとめてペーパーバックで再刊している。エイクマン再評価のきざしがあちらでも起こっているのでしょうか。

横山　エイクマンは現在の英米では一部に熱狂的な愛読者がいる作家でしょうね。とはいえ、こんなマイナーな作家のよりによって自伝を選んだのは、われながら「快挙」あるいは「暴挙」だと自負しております（笑）。エイクマンの未訳の優れた短篇群は今後も翻訳紹介する機会はあるでしょうが、自伝となると、今回を逃せばまず無理だろうという判断からです。このシリーズの選択の基本方針は、もちろん面白いというのが一番だけど、文学は何でもありなんだ、というのを示すということもある。フィクションだけを考えてみても、いわゆるメインストリーム・フィクション、純文学の他に、ジャンル・ゲットーといいますか、ミステリ、ホラー、ＳＦ、ファンタジー……といろんなジャンル分けがなされているわけですが、これには明らかに意味がないでしょう。また、自伝や日記、書簡だって文学以外の何物でもないし、面白ければ何でもいいじゃないかと。既成のジャンルに収まらない作品、越境する作品は、わけがわからないということで見落とされがちだし、読者も敬遠する傾向がありますが、面白いもの、



『救出の試み』
原書カバー

凄いものは必ずある。そういった作品を本シリーズでは揃えた、ということになるんでしょうか。実は、わたしは五、六年前に、〈二〇世紀イギリス小説個性派コレクション〉という五冊の翻訳シリーズ（新人物往来社刊）を、佐々木徹さんと共同編集しており、そのときはあまり無茶はしないように（笑）自制心を発揮したんですが、今回はもう全開ということで。

若島　かつて早川書房で出ていたシリーズ〈異色作家短篇集〉というのも、そういうジャンルを超えたところを〈異色作家〉〈奇妙な味〉という言葉でくくっていましたね。私が二〇〇七年に〈異色作家短篇集〉のアンソロジーを三冊（アメリカ篇・イギリス篇・世界篇）新たに編んだときに、イギリスの作家**ジョン・メトカーフ**の短篇「煙をあげる脚」（一九二五）を選びまして、横山さんに翻訳をお願いしました。メトカーフも幻想怪奇もののアンソロジーで何篇か訳されているけれど、単行本は出ていない作家です。本シリーズの唯一の短篇集**『煙をあげる脚』**は横山さん編でメトカーフの傑作を厳選した内容になりますね。

メトカーフ短篇集成 *Nightmare Jack* カバー

横山　「煙をあげる脚」はビルマの神秘的な宝石をめぐる話で、この宝石を狂った外科医が船乗りの脚に何と埋め込んでしまうという奇譚。メトカーフもほんとうに独特な作家でして……ジャクスンと同じく、「書く」しかない人だったような。小説家としてしか存在できない人。ただし、ジャクスンとは異なって、彼の作品はほとんど売れなかったし、一般には評価されなかった。かなり年をとってから、かのアーカム・ハウスに拾ってもらって久々に刊行できた中篇が『死者の饗宴』（一九五四）。これは傑作なんだけれど、とにかく売れないからね、悲惨な末路だったようです。

若島　メトカーフは奥さんがイーヴリン・スコットという当時は有名な作家なんですよね。彼女も今ではすっかり忘れ去られた作家になっていますが、アメリカのヴァージニア・ウルフ的な位置の人で。ウィリアム・フォークナーの『響きと怒り』が刊行されたときに、出版社が彼女の書評を販促に使ったぐらいに影響力もあったそうです。

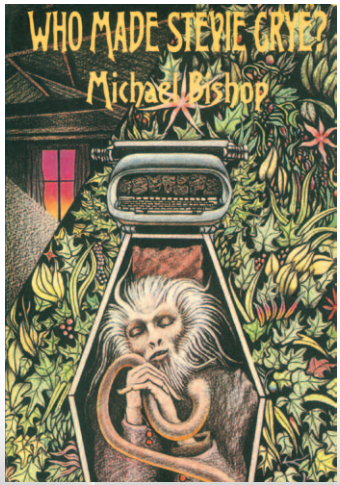
横山　そんな有名な女性だとは知らなかった。メトカーフの魅力はやはり謎めいた作品にあり、その中でも「ブレナーの息子」（一九三二）というのが頂点に立つ。何が起きているのか分からないところはエイクマンに似ているけれど、この作品は読んでいて頭がおかしくなりそう。たぶん、本人も頭がおかしくなりながら書いたんだと思いますけど（笑）。

若島　『死者の饗宴』も怪奇小説系出版社の総本山であるアーカム・ハウスから出ていますが、そういえば**マイクル・ビショップ**のモダン・ホラー**『誰がスティーヴィ・クライを造ったのか？』**（一九八四）、これもアーカム・ハウスで刊行されたものですね。

横山　ビショップはSF界ではネビュラ賞までもらった作家ですけれど、この作品は分類不能

ということで、大手はもちろん中堅からも断わられて、やはり、救いの主は弱小出版社アーカム・ハウスしかなかった（笑）。ビショップは今はあまり人気がないようですが、『誰がスティーヴィ・クライを造ったのか？』は秀作です。SF作家が余技で書いたホラーみたいなかたちで、見逃されているのならば勿体ない。アメリカ南部の小都市に住むヒロイン、スティーヴィの愛用するタイプライターが故障して、修理から戻ってくるとひとりでに文章を綴り始める、それはスティーヴィ自身の不安と恐怖から織り上げられた「フィクション」に他ならず、中身を読むうちに彼女は現実と虚構の区別ができなくなる……という物語。スティーヴィ自身が書いた小説まで挿入されて、複雑な入れ子構造が採用されている。その点では一種のメタフィクションですが、同時に、当時量産されていた「モダン・ホラー」のパロディの側面もあります。ただし、決して頭でっかちの作品ではなくて、純然たるホラー・ノヴェルとしても怖い。

若島　『誰がスティーヴィ・クライを造ったのか？』は二〇一四年に〈三十周年記念版〉という著者が序文を書いて、本文を修正した版が出ましたね。ビショップはアメリカSF界の中ではジャンルの枠にはなかなか収まりきらない、知的で地味な作風の作家で、短篇が有名な *Best American Short Stories* という年間傑作選にも選ばれたことがあるほど、メインストリームからの評価も得ています。彼の多彩なキャリアの中でも、『誰がスティーヴィ・クライを造ったのか？』は突出して異常な作品に映りますね。



『誰がスティーヴィ・クライを造ったのか?』原書カバー

横山　しかし、『誰がスティーヴィ・クライを造ったのか？』にしても、メトカーフにしても、出版社が見つからず、果たしてどれだけ読者がいるのかという状態で刊行された作品なのに、やはり突出したものというのは、時が経つと必ず読む人が現れるんですよね。それが文学の力だと思う。

若島　それは本当にそうです。だから、気が早いけどこの叢書の第二期ラインナップを考えると（笑）、紹介したい同じような作家がたくさんいますね。例えばトマス・リゴッティ。彼の作品なんてマイナー出版社から極小部数しか出てなくて、市場に出ているものはすべて彼のサイン入り、みたいな状態ですが、そんなリゴッティでも最近大手のペンギン・ブックスから短篇選集が出たんですよね。

横山　そもそもの話、たとえばエミリー・ブロンテの『嵐が丘』がそうでしょう。刊行されたときはほとんど無視されて、作者本人もほどなくして死んじゃってという状態だったのが、二十世紀には大古典ですものね。ジェイムズ・ホッグの『悪の誘惑』もスケールは違うが似たようなもんだな。

若島　アイリス・オーウェンズの『アフター・クロード』も最近になってアメリカでペーパー

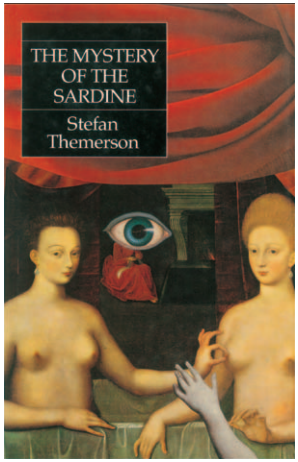
バック化されたけども今までは忘れられた作家ですからね。

横山　**ステファン・テメルソン**という作家も知らなかった。**『ニシンの缶詰の謎』**（一九八六）、これはどういう作品なんですか。

若島　これを選んだ理由が一つありまして。我々が扱う作品は基本的に英米系なのでアメリカ・イギリスの作家が多くなる傾向があるので、それ以外の国のものも入れといたほうが後々間口が広がるだろうと、それでこのポーランド人作家のこれを選んだんです。といっても、彼はもともと前衛映画作家で、作品自体がとんでもないものなので、出身国なんてあまり関係ないといえば、ない。ポーランド人だけどイギリスに渡ってからは英語でも書いたという作家です。

横山　コンラッドみたいですね。

若島　まったくそう。クリスティーン・ブルック＝ローズという、英国産のヌーボー・ロマンみたいな作品を書く前衛小説家がいるけども、彼女の夫もそうだよね。ポーランドからイギリスに渡る作家の系譜。テメルソンなんていう人は、私もちょっと前まで全然知らなかったけれど、あるとき沼野充義さんにテメルソンが撮った実験映画の話を聞いたんです。それで色々探っていったら、イギリスに行ってから自分でギャバーボッカス・プレスという小出版社を作って、訳のわからない作品の英訳版を出して、ということを知りましてね。面白いのは、数学者のバートランド・ラッセルが友達らしくて彼が序文を書いていたりするのね、不思議な人脈ですが。テメルソンの奥さんはフランチェスカという画家でアルフレッド・ジャリ『ユビュ王』の挿絵なんか書いてまして、日本でも翻訳が出てます（『ユビュ王　comic』宮川明子訳、青土社）。



『ニシンの缶詰の謎』原書カバー

横山　前衛夫婦なのか（笑）。ポーランドには独自の前衛文化がありますよね。ゴンブロヴィッチとかさ。映画ではポランスキーがもちろんポーランド人だけれど、ロバート・グレイヴスの傑作短篇「叫び」を長篇映画にしちゃったスコリモフスキもそうだ。

若島　テメルソンもかなり変な作家です。この『ニシンの缶詰の謎』はハチャメチャな内容なんで物語の筋を紹介するのが難しいんですが……爆弾テロの場面から始まるんだけど、爆発するのがなんとプードル犬（笑）。主人公というのがいなくて、誰一人まともじゃない登場人物たちが章ごとにドタバタする、でもその関係も出来事もランダムのように見えて実はつながっている、という不思議な構造をもつ小説。それで『虚構の男』同様に、最後はええーッと驚く終わり方をする、ＳＦでもあり幻想小説でもありユーモア小説でもあり……とにかくヘンな作品です（笑）。

横山　あらためてラインナップを見ていくと、タバコ屋の親父から前衛映画作家まで揃えて、

実に懐が深いシリーズだなあ（笑）。まあ、単に無茶苦茶ともいえるか。

若島　最後に横山さん訳の**チャールズ・ウィリアムズ『ライオンの場所』**（一九三一）。これはもう翻訳が完成しているんでしたっけ？

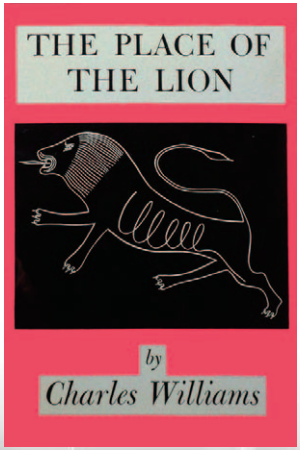
横山　いや、二十代の頃に半分ぐらい訳したけれど、大昔にやったものなので……話せば長くなるんですが（笑）、何と四十年近く前にある出版社でチャールズ・ウィリアムズ選集という企画が、奇蹟のごとくいったん通った。そのときのために翻訳しかけたものが手元に残っている、ということです。ウィリアムズも日本では知る人はごく僅かでしょうね。翻訳は国書の幻想文学大系で一冊出ているきりで（『万霊節の夜』）、しかもあのシリーズで一番売れなかったらしい（笑）。チャールズ・ウィリアムズという人は本来は詩人で、C・S・ルイスやJ・R・R・トールキンたちのグループ、いわゆるインクリングズに途中から参加しますが、非常にカリスマ性があった。ルイスの場合、彼にとんでもなく強烈な影響を受けてしまい、そのため、トールキンが嫉妬したほどです。ウィリアムズは全部で七冊の長篇を残していますが、「神学的スリラー」、「形而上学的ショッカー」と呼ばれたりしました。でも、「形而上学的ショッカー」といわれても、何だかわからないですよね（笑）。いずれも、オカルティズムや魔術を題材に、独自のキリスト教神学を展開する小説で、鮮烈なヴィジョンに彩られています。この『ライオンの場所』にしても、なかなか説明がむずかしいけれど、ごく簡単に言えば、プラトンのいう〈イデア〉は実在するという物語です。イデア界が現実世界に侵入してくる。彼には、『多次元』（一九三一）という、根本のテーマにおいてトールキンの『指輪物語』に似ているのではないかと思える作品もありまして、そちらも最初の数章は訳しています。

若島　では第二期で刊行ということで（笑）。

横山　ウィリアムズの小説は「形而上学的ショッカー」と称されるくらいだから、やはりジャンルを越えており、たとえば長篇第一作の『天上の戦い』（一九三〇）の場合、出だしの雰囲気は黄金期の英国探偵小説そのものなんですよ。ところが、いつのまにか、聖杯をめぐる宇宙的規模の善と悪の闘争の話になってしまう（笑）。『ライオンの場所』だって、最初は、移動動物園から逃げ出したライオンに遭遇する場面から始まるという分かりやすさ（笑）。どうか、神学や形而上学という言葉に恐れをなさないでくださいね。ただし、ウィリアムズは本質的に神秘主義者、幻視者（ヴィジョナリー）なので、世間一般の基準からすると変なのかもしれないけれど、メトカーフやジャクスンが変だというのとはまた違いますね。

若島　変な人の変な小説、というのは最近よく読まれているでしょう。ミュリエル・スパークとか。

横山　スパークも頭が変だよなあ（笑）。スパークはイギリス小説の主流作家として評価が高かったけれど、『運転席』なんて典型的で、わけがわからない、なにこれ？とい



『ライオンの場所』
原書カバー

う作品がある。

若島　本シリーズの中で一番まともなのはマイクル・ビショップでしょうね。彼のSF評論集を読んだことがあるんですが、まともというかバランスが取れて健全な作家だということがよくわかる。

横山　そうですね、ジャクスンは病んでいるし……エイクマンやサーバンになると、病んでいるというより、むしろ腐敗している（笑）。ただし、病んでいること、腐敗していることは文学にとっては重要でしょう。私たちの世界には、病んだ精神、腐敗した精神、逸脱した精神にしか捉えられない相というのが確実にあるわけで、それを言語によって顕現させるというのはやはり文学の使命のひとつではないでしょうか。

若島　ラムジー・キャンベルがエイクマンのことを「私が会ったことのある人の中で一番歯が汚い」と言ってますね（笑）。

横山　うーん、凄い発言（笑）。

若島　まあ、そういう変な作家をこの〈ドーキー・アーカイヴ〉では出し続ける、ということですね。

横山　ドーキー・アーカイヴというのは勿論フラン・オブライエンの小説のタイトルだけど、そういう名前の出版社もあるんだよね。

若島　アメリカの小出版社で、それこそどこも出さない小説を引き受ける前衛出版社です。そこからシリーズ名を拝借したという。実は第二期で考えているものでデイヴィット・マークソンの『ウィトゲンシュタインの愛人』という小説があって、それはそのドーキー・アーカイヴから出ていましてね。その紹介文をアン・ビーティが書いていて「この本は実に五十以上の出版社から拒否に遭った、ギネスブック級の記録保持者である」とある（笑）。それ以前の記録保持者はベケットで、『モロイ』の四十四社だそうです。そういうものを刊行する出版社なんです。実は『ウィトゲンシュタインの愛人』も以前日本のある出版社の人が検討してやはり躊躇して、結局出ませんでした。

横山　まあ、今回のシリーズは、常識ある出版社なら（笑）手を出さない、出せない作品がほとんどですが、遂に陽の目を見ることになりました。こんなものが実現するとはいまだに信じられないけれども、皆様も全冊読んでみられて、是非ともこの驚きを分かち合い、文学の妖しい力を実感していただきたいと思います。

若島　知られざる傑作、忘れ去られた作家というものは、なんとなく自分の胸の内にしまっておきたい、自分だけのものにしておきたい、という気持ちもあるんですが、今回の企画では思い切ってそれを大放出することにしました。ごく少数の熱狂的な読者に迎え入れられれば、と思う一方で、そういう読者が実は思いがけないほど多数いたんだ、とわかれば、それがこのシリーズを第二期、第三期と続けていくブーストになります。どうぞご支援のほどをよろしく！

知られざる傑作、埋もれた異色作を
幻想・奇想・怪奇・ホラー・SF・ミステリ・
自伝・エンターテインメント等ジャンル問わず、
年代問わず本邦初訳作を中心に紹介する
新海外文学シリーズがついに刊行開始!

❖体裁：四六判・ハードカバー／平均予価 2400 円　❖装幀＝山田英春

初回2冊同時刊行（2016年5月刊）

L・P・デイヴィス　矢口誠訳
『虚構の男』 L.P.Davies *The Artificial Man*
知られざるミステリ作家による国際謀略スパイサスペンスにしてＳＦの奇想天外エンターテインメント。どんでん返しに次ぐどんでん返しの驚愕作！　定価：本体 2200 円+税
ISBN978-4-336-06057-0

サーバン　館野浩美訳
『人形つくり』 Sarban *The Doll Maker*
謎の英国覆面作家による幻想譚 2 篇を収録。徹底した被支配関係から生じる魅惑と恐怖のないまざった荒々しいマゾヒズム的快感が展開する傑作集。 定価：本体 2400 円+税
ISBN978-4-336-06058-7

以下続刊　＊タイトルは仮題です

シャーリイ・ジャクスン　北川依子訳
『鳥の巣』 Shirley Jackson *The Bird's Nest*
女流ホラーの名匠による多重人格ものの傑作長篇！

ドナルド・E・ウェストレイク　矢口誠訳
『さらば、シェヘラザード』 Donald E. Westlake *Adios, Scheherazade*
ユーモアミステリの第一人者による実験的ポルノ（作家）小説！

ステファン・テメルソン　大久保譲訳
『ニシンの缶詰の謎』 Stefan Themerson *The Mystery of the Sardine*
ポーランドの前衛映画作家による破天荒な哲学ノヴェル！

ロバート・エイクマン　今本渉訳
『救出の試み』 Robert Aickman *The Attempted Rescue*
現代怪奇小説の巨匠による摩訶不思議な自伝！

アイリス・オーウェンズ　渡辺佐智江訳
『アフター・クロード』 Iris Owens *After Claude*
アメリカの女流ポルノ作家による痛快なオフ・ビート小説！

チャールズ・ウィリアムズ　横山茂雄訳
『ライオンの場所』 Charles Williams *The Place of the Lion*
知られざる幻想作家による美しいキリスト教幻想小説にして形而上学的ショッカー！

【責任編集者紹介】

若島正
1952 年京都市生まれ。英米文学者・翻訳家・詰将棋、チェス・プロブレム作家。京都大学大学院文学部修士課程修了。現在、京都大学大学院文学研究科教授。日本ナボコフ協会会長、チェス・プロブレム専門誌「Problem Paradise」編集長。著書に『乱視読者の冒険 奇妙キテレツ現代文学ランドク講座』（自由国民社）、『ロリータ、ロリータ、ロリータ』（作品社）、『乱視読者の英米短篇講義』（研究社）、『乱視読者の帰還』（みすず書房）、『乱視読者の SF 講義』（国書刊行会）など、訳書にウラジーミル・ナボコフ『ロリータ』（新潮社）、『ローラのオリジナル』『記憶よ、語れ 自伝再訪』（共に作品社）、Ｇ・カブレラ=インファンテ『煙に巻かれて』（青土社）、編訳書にシオドア・スタージョン『海を失った男』（晶文社）、チェス小説アンソロジー『モーフィー時計の午前零時』、サミュエル・R・ディレイニー他『ベータ２のバラッド』、トマス・M・ディッシュ『アジアの岸辺』（いずれも国書刊行会）などがある。

横山茂雄
1954 年大阪府生まれ。英文学者・作家。京都大学大学院文学部修士課程修了。博士（文学）。現在、奈良女子大学教授。稲生平太郎の名で小説を執筆。横山名義の著書に『聖別された肉体―オカルト人種論とナチズム』（書肆風の薔薇）、『異形のテクスト―英国ロマンティック・ノヴェルの系譜』（国書刊行会）、『神の聖なる天使たち―ジョン・ディーの精霊召喚 1581-1607』（研究社）、訳書にマーヴィン・ピーク『行方不明のヘンテコな伯父さんからボクがもらった手紙』、ヒレア・ベロック『子供のための教訓詩集』（共に国書刊行会）、マーガニータ・ラスキ『ヴィクトリア朝の寝椅子』（新人物往来社）、編著に『遠野物語の周辺』（国書刊行会）、『危ない食卓― 十九世紀イギリス文学にみる食と毒』（新人物往来社）など。『日影丈吉全集』（国書刊行会）の編集、全巻解説も手がける。稲生名義の著書に『アクアリウムの夜』（書肆風の薔薇）、『アムネジア』（角川書店）、『定本　何かが空を飛んでいる』（国書刊行会）、『映画の生体解剖』（高橋洋と共著、洋泉社）がある。

ジョン・メトカーフ短篇集　横山茂雄他訳
『煙をあげる脚』 John Metcalf *Selected Stories*
イギリス怪奇・超自然小説の名手による初のベストコレクション！

マイクル・ビショップ　小野田和子訳
『誰がスティーヴィ・クライを造ったのか?』 Michael Bishop *Who Made Stevie Crye?*
アメリカＳＦの旗手によるメタフィクショナルなモダン・ホラーの傑作！

国書刊行会

〒174-0056　東京都板橋区志村 1-13-15

電話 03-5970-7421　ファックス 03-5970-7427